

## 総合討論

司会 前田 (道立畜産試験場) 4人の方から話題をいただきましたが、簡単に整理させていただきますと、鶴川さんからはこの間の農業動向等の解析から北海道全体としては現行の中規模あるいは大規模層の比率が非常に高くなっている。それは、頭数増が最初にあつて、その後、耕地面積が追従していくという、全道的に見るとそういう動きですが、こと十勝に限定すると、頭数は増えるけれども、耕地面積そのものはあまり増えていかない。そういう状況の中で、このあとの農業情勢、農政等を見ると、やはり土地利用型でやっていく、支持されるような形態に展開していく必要があるという提案だったと思います。それを支える技術で、富沢さんから地域での飼料自給率の向上に向けた取り組み、キーワードはおそらくコントラクター等を利用した地域の生産の支援システムかなという実例報告がありました。私も新鮮な感じで聞きましたが、大庭さんからは地域ブランドの概念から実際にどういう取り組みが行われているか紹介がありました。その中に、私どもが関係する酪農も地域ブランドを構成する一構成員になって、特にそれをそのあと認証するなり、あるいは広げていくためのキーワードとして、生産の在り方、それから環境というものにどれだけ配慮された生産システムを持つかということが、私ども研究会としても十分かわる課題としてお話がありました。その環境面から見たときに、十勝の酪農が抱えているふん尿の処理という問題に関して、田村さんから現状報告とそれを解決するためのいくつかの手段を紹介され、どの方法を採用するかについてはケースバイケースで考えていかなければなりません、基本的には、鶴川さんの解析にあつたような形については、頭数は増えるが、必ずしもそれに見合った耕地面積が確保されないということから、耕畜連携という形で在り方の提案がありました。

一つ一つの話は単独で十分議論しなければならぬ大きな課題だと思いますが、これを一つ一つ議論するよりは、この4つのテーマを総合的にどういうふうに入り組ませながら十勝の酪農を発展させていくか、そういった視点での議論のほうがむしろ認識として議論しやすいと思います。普通、どちらかという、1つのテーマについて議論されるのが一般的ですが、どうも私は話題提供を聞かせていただいて、おのおの話がリンクされた上で十勝の酪農、あるいはその発展方法を考えることになるのかと思うので、意見、質問も合わせてこのテーマを総合的にリンクさせながら議論していきたいと思っています。最初に誰か口火を切っていただけるとその辺りの話に進んでいくと思います。発言される方は所属と名

前をよろしくお願ひします。どなたか、質問でも結構です。よろしくお願ひします。

なかなか口火が出ないので最初はこちらから少しお願ひしてよろしいでしょうか。十勝の酪農なり畜産に永くかかわられて、非常に現状に詳しい方と思いますが、帯広農業振興公社の森脇さんが出席されていますので、現状の問題あるいは意見があれば発言お願ひしたいのですが。

森脇 (帯広市農業振興公社) 帯広の、特に十勝を中心とした話をいただき、本当にありがたく思います。鶴川さんに少し聞きたいのですが、本来であれば『土-草-家畜』といくべきがちょうど逆になっているのが十勝農業であるというのはまさしく私もそれは同感で、帯広では、成換牛1頭あたり0.3~0.4haで牛が飼われているというのが実態です。十勝がこれだけ乳量が増えてきた背景には、私が考えるには大雑把に言って4つの補完システムが他の地区よりも進んできたからだろうというのが1つあります。1つは公共育成牧場が非常に充実している。2つ目はコントラクターが発達してきています。3つ目は哺育システムというものが生まれてきています。最後にTMRというものがどんどん入ってきています。ですから、この4つが家族形態、個別形態の労働を非常に分散させて、好調の経営は乳量をどんどん搾ってきたという背景があろうと思います。それで、乳価を振り返ってみると、この十数年安定しているわけです。いくらかはありますが増産基調できていて、法人、大型経営者がどんどん生まれてきている。これには設計が非常にしやすかったわけです。頭数かける1頭あたりの生産量で、しばらくはこれだけの頭数でこれだけ搾れば返せると計算をして、それが大きな要因になってきていると思います。このことが今、崩れようとしています。おそらく、来年から3年間、増産でなく減産に入る予定です。それと畑作酪農地帯について、先ほど鶴川さんからも話がありました。WTOの問題で小麦はこれ以上作れない、ビートは砂糖を買え、いろいろなことでダブルパンチが来ているわけです。その中で今回はコストの話、複合経営、あるいはそういう畑地帯のコストをどう下げていくか、それでコストの中には、われわれの農業経費に占める購入飼料費は大体30~40%、自給飼料費が15~20%、つまり農業経費の50~60%は飼料生産に取られていることが、今の十勝の実態です。そのなかでもっとどういう部分をどうやってコスト低減して持続可能な経営がされていくのか、そのへんもう少しあれば教えていただきたいと思っています。以上です。

大原 (道立畜産試験場) 関連した質問です。鶴川さんの話の最後のほうの、「経営の構造を転換させないで経営構造を補強強化」という言葉は、文章でいうと何となくわかったような気もするのですが、もう少し砕いて教えていただきたいと思えます。おそらく今の森脇さんの話とも絡んでくるのではないかと思います。

鶴川 森脇さんがおっしゃったことは、私もその通りだと思います。十勝の酪農経営がこれだけ強化できたのは、おっしゃるとおり補完システムとして公共牧場、コントラクター、哺育システム、TMR、そういったものがあって今の十勝酪農があるということで、十勝の酪農経営が単独で存立していると私は全然思っていないで、そういった補完システムがあって初めて今の十勝酪農があるのだというのはその通りだと思います。そういう中で森脇さんがおっしゃっているように、頭数拡大、あるいは個体乳量が高まる中で、購入飼料費がだんだん高まってきたというのもまた事実だと思います。そういう中で、今度WTOの関係もあると思えますが、乳価が下がってきていますし、来年から減産型の生産調整をさせてもらうということですから、その中の対応としては、私はやはり購入飼料費を低減させるような方向が1つ大きいのではないかと思います。具体的には先ほどの繰り返しになりますが、対策としては自給飼料でどれだけこれまで購入飼料に頼ってきた部分を代替できるかということ、具体的には、これだけ高泌乳が進んでいますから、自給飼料の高品質化に尽きるのではないかと思います。そのための技術としては、北海道農研センターの研究を宣伝するわけではありませんが、私はアルファルファとか集約放牧などはそういった技術の1つになり得るのではないかと考えています。それともう1つ、大原さんから質問いただいたことで、経営構造の転換ではなく補強強化が必要だと申しましたが、それは生産方式にかかわっており、十勝あるいは北海道酪農のその発展の方向として、私どもは大雑把に2つあると思えます。1つはフリーストールなどを整備して、100頭以上規模で拡大していく方向と、もう1つは、例えば50頭なら50頭規模でいく方向と2つあると思えます。先ほどのスライドでも2つの発展方向があると申しましたが、今後のWTO国際規律への対応を考えると、私は例えば50なら50ha規模の生産方式のほうが国民的には支持されるだろうと考えており、それで今50ha規模の経営構造がそのまま通用できるような技術導入が必要だろうと申しました。これはかなり、私としては大胆に言っているつもりなので、みんなが今そう思っているとは思いませんが、私はそう考えています。従って経営規模で言えば、今50ha規模を100ha、あるいは100頭規模に拡大するような経営構造の転換ではなく、例えば50ha50頭規模であればそういった経営構造のまま維持できる技術導入、具体的には先ほどの飼料費の低減などがありますが、ただそのままでは維持できま

せんから、経営の中身としては自給飼料の高品質化、高度化によって飼料費も節減できるような仕組みを作りながら、経営規模としては50haなり50頭規模で維持できる、そのための技術導入が必要だろうし、将来的にはそういった生産方式が国民的に支持を得られるだろうと考えています。

司会 今の鶴川さんの話の中では、今の頭数規模なり面積規模の中で現況の生産量を上げていくためには、飼料費を下げながら、なおかつ自給飼料の比率を高め、自給飼料の高品質化が必要だということだと思います。先ほどの富沢さんの話の中で、地域でトウモロコシの面積が拡大してきたり、それから草地の更新等がシステム的に地域で取り組まれてきたとありましたが、トウモロコシの面積の拡大が経営の中で今言った高品質化なりに貢献するような方向で動いていくように、地域としてどのようにやっていくのでしょうか。

富沢 自給飼料の高品質化、または自給率を高めるという意味で言えば、サイレージ用トウモロコシの栽培というのは、生収量で単純にいくと牧草の1.5倍取れます。購入飼料のほうは、単味飼料ではトウモロコシ圧ペンなどが販売されていますが、エネルギー飼料としても重要ですし、ちょうど1年前ぐらいに単味飼料から配合飼料まで価格がかなり高騰したことともあり、やはり自分たちで経営費を抑えるためには栽培して、粗飼料的な要素もありますから、そういう面でも利用したいということもあります。またふん尿処理のこともやはり問題になりますから、サイレージ用トウモロコシを栽培するときには10aに5トン上限に投入してもらっています。そういうふん尿の処理ではなく利用の方向でも可能性があるということなので今後まだ増えるのではないかと考えています。

司会 ありがとうございます。飼料の高品質化なり自給率向上という意味では、トウモロコシの面積拡大というのも1つの大きな技術であるとして今紹介がありましたが、会場の皆さんの中から何か意見がありますか。

池滝 (帯広畜産大学) 今の質問に関連して富沢さんに伺いたいのですが、各先生方のおっしゃった自給飼料の高品質化というのはまさにその通りだと思います。自給飼料生産コストという面からすると、富沢さんの発表の中にある不耕起栽培というのは非常に魅力的な技術の1つだと理解しています。もし資料等があれば少し話していただきたいのは、コントラクターなり、作業時間が大幅に減るということで、不耕起栽培でコントラクターに頼んだ場合と、通常の慣行法でやられた場合を比較すると、ha当たりどの程度の違いがあるのかということがもしおわかりになれば、それと、6畦の不耕起栽培プランターというのは金額的にどのくらいするのかと少し思ったものですから、質問をします。

富沢 不耕起プランターを用いた作業の時間料金についてですが、不耕起プランターはまだ忠類村では導入がないのでまだ試算していません。労働時間が減るとことでの乳牛に対して生産コストが下がるよくなればということと展示させてもらっている段階で、今後きちんと数字を出していこうと思います。それから、不耕起専用のプランターですが、3年前ぐらいまでは、1畦当たり100万円と言われていました。今は安くなったと今年の春に伺っています。

酒井 (道立根釧農業試験場) 不耕起と簡易耕起のところで質問したいのですが、完全耕起に対して収量は若干下がっていると思いますが、播種作業の期間が短くなります。これからトウモロコシの面積を拡大していくときに、全部完全耕起でおこなうと1週間から2週間かかり播種時期がそのあとに遅れていって、播種時期が遅れることにより減収となる、あるいは熟期が進まないというのが出てくると思います。その場合、同時期に播種すれば確かに簡易耕・不耕起のほうが反収が下がりますが、播種時期とかを前倒しすることにより簡易耕がコントラクタにとってよいとか、そういうような比較、計算されていれば教えていただきたいのですが。

富沢 そういう計算も現在のところしていませんが、忠類村、十勝南部のほうでは5月中旬から圃場を用意しまして、地域全体で大体長くて2週間ぐらいかけて播種の方は終了します。4畦の普通の総合播種機のプランターであれば、1日5haくらい頑張ればできるのですが、この高性能の不耕起専用プランターですと、1日本当に頑張ると12haできる。それであれば倍以上できるということにはなりますが、播種を前倒しできる可能性は土壌凍結、乾燥などの問題等絡むので、なかなか難しいと思います。

酒井 前倒しでなく、トウモロコシの栽培が増えてきた場合に、完全耕起すれば播種作業の遅れが出てくるのではないかと思います。その時に、播種時期が完全耕起で遅れたものは多分収量が下がるような気がするそのデメリットと、簡易耕起は確かに同時期に播種していれば反収として下がりますが、5月中旬ぐらいに一気に播種出来る分が多くなるメリットがありますから、比較とかができないものかと思ったのですが。

司会 酒井さん、こういうことですね。100ha造成するのに完全耕起すると10日間かかります。けれども、簡易耕起であれば、先ほど大体20%ぐらいの時間ということですから、2日間で終わる。そうすると、8日間は完全耕起して遅れて生育期間が短くなるために起こる減収と、簡易耕起で早めには種することとで比較すると、最終的には収量そのものはそんなに大きな差がないのではないかと、そういう見方も必要

ではないですかということですね。ですから、多分、先ほど酒井さんの言ったことは、労働時間、は種にかかわる時間が20%、あるいは30%程度に少なくなるということが、このあと栽培面積を増やしていくためには非常に重要な技術ではないでしょうかという提案だと思います。それでよろしいですね。

それで、私から大庭さんに聞きたいのですが、こういった議論の中でいつも、どれぐらい作物がとれますとか、どれぐらい家畜ふん尿は草地にまけるかという議論をするのですが、先ほど大庭さんのお話の中で、ブランド化に向けて必要な項目として生産の場での話として、クリーン農業とかあるいは環境安全とか、そういった提案がありました。今日、提案があった土地利用型畜産だとか、あるいは田村さんの言った耕畜連携だとか、そういったものがブランド化にとってどういう役割をもつか意見をいただければと思います。

大庭 非常に難しい問題です。この分野は、私もほとんどわからない素人ですが、1つは、観光の分野では特にふん尿です。本州の方々というのはこちらに来るとふん尿のあの形態にびっくりする。1つはにおい。牧場というのはイメージ化されてとてもきれいだと、本当に(笑)。あんなにおいとか形態があるというのが信じられないというのが、やはり観光の部分です。それについては現在、いろいろな形で法施行されているし、皆さんも努力、情報提供されているので非常にいいと思います。あと、農業の部分については、この研究会と関係するかどうかはわかりませんが、例えば、基本的には北海道はあまり農業を使っていないというイメージがあります。これはあくまでもイメージです。本州の方々が北海道を見たときのイメージとして安心、安全というのは、一次産品についてはとても信頼を持っています。加工品などは少し違いますが、一次産品に関して北海道は全面的に受け入れるような消費者は多く、完全に需要を持っています。それが今の質問の部分とどう結び付くかという話になると非常に難しくてわからないものがあります。

それと、今回の話の中で出しましたが、実は私どもはバイオマスをやっています。十勝管内のいろいろな賦存量を調査して、それと同時に、皆さんよくご存じのバイオエタノール事業を3省から国の事業をいただきましてやっています。その中にエネルギー作物も入っています。現実的にエネルギー作物で作ったバイオエタノールで車を走らせています。その中で一番、問題になってくるのはやはり価格だと思います。特に4大作物についてはビート、小麦について既にいろいろな形で相当なところまで進んできています。現実の部分でしか私はわかりませんが、基本的にエタノールのコストは合わないと言われてます。ブラジルから横浜着が大体40円ぐらい。日本で年間3万キロリットル作ってもせいぜい80円です。つまり作るのに倍かかるということですね。エタノールという話になるとそうなりますが、基本的にはエタノール

はあくまでも付随、いろいろな作物からいろいろなものがとれるカスケード利用というのを北農研センターと一緒に共同でやっています。これについてはいろいろな付加価値があるものがとれています。つまり、単体でものを抽出するとなかなか価格のコストが合わないですが、1つの作物からこういう過程でこれがとれる、これがとれる、これがとれるという話になってくると、結構いろいろな形で価格が合ってくる部分が出てきます。そういうような形態を作ろうという形で、出口の部分ではやらせていただきます。特に4大作物については特にやらせていただいています。

司会 実は今、大庭さんに話をさせていただいたのは、どうしても私たちは、どうやってトウモロコシを作るとか、どうやって家畜を飼うという議論はよくするのですが、実際のエンドユーザーは消費者で、チーズであったり牛乳であったりするわけで、その辺りを僕たちがどうイメージして飼料生産なり家畜管理の技術開発をしていくかということが非常に重要なポイントになるのですが、どうもそのところが議論する機会が少ない。大庭さんは自分は場違いだとおっしゃっていますが、逆に私どもにとっては、いかにそのことをイメージした技術開発を進めていくかということが重要になると思います。私ばかり質問すると進行が大変ですが、意見をいただきたいと思います。

河合 (帯広畜産大学) 今の話に関連してブランドの話ですが、本州の方のイメージという話がありました。結構、コマーシャルとかを見ても、十勝にかかわらず北海道ブランドという放牧地の風景が映って、うちを見にくる学生たちもそうですが、北海道の牛乳というのは放牧している牛から作られて、それでチーズやバターが作られているというイメージがすごいと思います。多少なりこの分野にかかわってれば、例えば自分のところで出たふん尿をまいてトウモロコシサイレーンを作って自給飼料の比率を上げて作った牛乳でチーズを作るというところすごく魅力的で、多少値段が高いのもしょうがないと思いますが、その辺りにギャップがあります。実際に放牧で作られている牛乳の率もそれ程高くありませんし、本州の方のイメージと実際の十勝で作られている牛乳とのギャップを明らかにしていくべきか、それともそういうギャップを今更ですが、隠した上でブランドとしてやっていくべきか。考えを教えてくださいたいと思います。

大庭 隠して、という言葉的には悪いと思いますが、実質的に今言われたように、放牧している、というのは、100%放牧だと思っているのです。本当に知識がある方というのは別で、これは本当にわずかの人たちです。実はウェブ調査を東京・大阪で3,000人・3,000人の計6,000人、年代別で色々な方にやっています。その中に出てきたこととして、今おっしゃったように、牛を飼ってふん尿をまいて循環させている

形を知っている方はほとんどいませんでした。すべて牛は放牧している。ふんはどういう処理しているかということまで考えがいかないというのが現状です。出口の部分の現状はそういうイメージになっていますので、これはもうしょうがないと思います。ですから、別に隠すとかではなしに、基本的にそれはそれで訴えていこうと。写真とかだけで、別にそこに何も書くわけではない。何かそういう形の部分は訴えてきたいというのはあっていいと思います。

もう1つは、技術的なものも含めて、やはりチーズを考えていかなければならないというのが1つの課題として出ています。すべてがフランスあるいはEU圏のチーズの技術をもたらってきているのが十勝の現状です。ですから、極端な話で言えば乳質が違いますからできあがる製品も味とかが違うとは思いますが、あまり特徴がなくなってきてしまっています。その部分についてはやはり飼うところから何かを考えた新しい商品、十勝らしい商品を出していかなければいけないということで、これについては既にチーズの工房の方々で若手リーグというのが動いていまして、技術的なものも含めて既に検討に入っています。いいネタがありましたらという形で探しているのも事実です。まだ具体的に商品としては出ていませんが、それもやっていかなければいけないということで、差別化していくという動きができています。ですから、放牧というのは非常に面白いと思いますが、もしそれができれば、うたっていても面白くて差別化になるのではないかと思います。

司会 北海道のイメージが放牧、実際には本当に短い期間だったり、あるいはほんの一部の農家であったりということで、これまでも放牧の重要性、特に土地利用型畜産というテーマ中では放牧の重要性が常に強調されていますが、なかなか放牧形態の農家数がそれほど増えていないというのが現状だと思います。何かこの辺りで技術的な問題があるのかどうか、あるいはこの辺りが解決しないと放牧の拡大が進まないということについて意見があればお願いしたいのですが。

松村 (北海道農業研究センター) 今の話から少し戻ってしまいかもしれませんが、放牧で今、忠類で実証試験をやっている、放牧の率をかなり高めると牛乳がかなり変わってくるというのはもうわかっています。その地域とも比較してみると、かなりの味の違いが出てきて、試飲していただいても評価の違いがあるということです。その中でアピールしているのは、地域の特徴を出したものが売れば、その地域の経済にもつながっていくのではないかとということで、もう始めています。もう一つ、放牧のイメージと実際に乖離があるという事実はありますが、舎飼いイコールバツではないかと思っています。舎飼いでも買い餌だけでやってしまっているような場合はもちろんあまり信用できません。餌として安心感が持てないというのはあると思いますが、実際に自分でいいサイ

レージを作って、ふん尿を還元してトウモロコシもしっかり採って、牧草もしっかり採って、年間を通じて高い自給率でやっている舎飼いもしっかりあるということを隠さないでどんどんアピールしていくべきではないかと逆に思います。放牧イコールクリーンというだけではなく、餌の自給率というところもしっかり安心感の核ととらえて、それをブランド化の中でもうまくうたっていくことができれば、本州の畜産との差別化という意味でも考えていけるのではないかと思います。ブランド作りをしている段階でも、飼い方だけにとらわれず餌の本質をしっかりとどうやって消費者にアピールしていきけるかというところ辺りを、ブランド化の中でどういうふうに応用していけばいいのかというのを大庭さんにお聞きしたい。

司会 先ほど大庭さんの話にあったように、認証制度の中に生産履歴、特に生乳の場合は今の集乳体制の中ではいろいろと難しいです。差別化のときにはまた独自のライン等を持たなければならぬようなことになると思います。今の放牧の話は、そういう意味では履歴を明確にすることで差別化の要因として十分であり、放牧に限らず生産履歴そのものを100%開示できることによって差別化につながると私は思います。

大庭 おっしゃるとおりだと思います。今の生産履歴の定義というのは、基本的には牧場をたどれるというところまでです。実質、その中でどのような餌を与えてどういうふうに応用しているのかというものには一切言及していません。一部、おっしゃられたような形の意見が出てきています。ただ、これをやってしまうと、実はフェルミエタイプのチーズ(編集部注 フェルミエチーズ=農家製チーズ)というのがあるのですが、牛を飼っていてそこで作られているところはいいのですが、実はそれ以外が半分あります。チーズだけを作りたいということで、管外から来られている方が結構います。要するにチーズ専用工場です。それはフェルミエタイプのチーズでなければ嫌だと。その辺りの所で、もう一つはそこで、自分の選定した牛乳、この牧場の牛乳が欲しいということで手に入らない工房さんがあるのです。ここを何とかしないと実は生産履歴を追えないという話になっていく部分があるのですが、そのところをどうやってクリアするかという問題が1つあると思っています。

司会 先ほどの、放牧の件ですが…。

平山(サージミヤワキ) 以前、新得の試験場に勤めていたので、非常に今日の話に興味を持って聞かせてもらいました。今、前田さんが言われたことについてですが、実は、私は試験場を卒業してから牧柵屋の仕事を少しやってきました。放牧を普及したいということで仕事をしてきた中で、今、言わ

れたように放牧が伸びない一番大きな理由は、はっきり言って、農協が反対をするということ。極端な場合は、わが村に来て放牧のアピールをしないでくれ、と農協にもつつかれる。例えば数十頭の牛を飼っている酪農家が放牧に転向すると、間違いなく乳量がやはり千 kg ぐらいは落ちてくる。それは困る、と。それから餌代がやはり3~4割、場合によっては5割ぐら購入飼料を落とすことができる。これも困る、と。これを村中でやられたら農協は困るのだ、ということで拒否反応をする。中には途中で転向してくれて放牧推進派になっている農協の組合長もいますが、そういう点は非常に大きなネックだったと思います。だから個々の農家がやる気を起こしても、周辺が力でそれをねじ伏せる。乳質が落ちたときに指摘されるというのが今までです。ただ、最近では新聞でも報道されているように、これから牛乳の生産調整が入ってくるとか、今日の話にあるような、少し自給飼料でいきたいのだというのは、本当に農業関係者全員がその辺りの理解をすれば、これは素晴らしい追い風になってくるという気がします。

それから大庭さんにも聞きたいのですが、今、十勝ブランドのチーズというのを聞いて非常に楽しみにしています。例えばカマンベールという名前でもどこにでもチーズがあります。実際にはフランスに行くと、厳密なAOCの規格の中で地域を指定され、製法はもちろん、乳牛は品種も指定されています。同じようなカマンベールだと思っても街が違えばほかの名前になってくる。その辺りと十勝ブランドはどういう形で整合性を持ってこれから進められるのかということをお聞きしたい。

大庭 おっしゃるとおり、AOCの協定の中に産地呼称制度というのがあり、カマンベールとかいろいろなチーズの名前がそれは使ってはいけないというものが全部あるのですが、十勝もそれをやっていかなければいけないというのは関係者の方々から声が出ています。先ほども言いました官能検査も含めて、まず十勝のチーズの中での分類ができていません。最初はカマンベールとかいろいろな形で分類をしていたのですが、やはりまだ技術的にフランスからのまねという形が多いものですから、十勝独自のいろいろな作り方、製法、あるいはこれから十勝独自の名前を付けるのかもしれないというのを、これから作っていきたいという話をしています。まだスタートした段階の部分では、ハードタイプとソフトタイプという形でしか分けていません。これは、ある程度、名前が付けられるような、十勝独自の名前が付けられて、十勝のどこのという特徴付けができるような形でさらに細かく分けていきたいと考えています。

司会 ありがとうございます。今、平山さんが放牧の伸びない背景について指摘がありましたが、そういった背景により、乳量を下げない、現在の乳量水準を維持しながら放牧技術を導入していくという技術的な課題があり、技術開発はこ

れまで結構やられていると思います。2～3年前、根釧農試の成績の中で、現行の乳量水準を維持していくための草地管理なり、放牧というのを提案されていますが、なかなかそれが現実に普及していかない。そこにはやはり、試験場の中での結果はでるのですが、実際に生産の場に戻したときに十分に技術がそのまま入っていかないと、やはり技術開発の中でのウィークポイントがどこかにあるのだと思います。その辺りについて根釧農試で担当された方がいます。山川さん、今は所属が違いますが。

山川 (道立天北農業試験場) とてつもない大きな課題です。今までのいろいろな話を聞いて、まず率直な感想は、十勝はやはりすごいなと。私は十勝で生まれたのですが、こんなに変わってしまったのかというので少し驚きを感じています。それはそれとして、私たちの研究の立場から少し自分の考えを話したいと思います。根釧農試では技術体系化チームの責任者ということで仕事をしてきました。そこで当時感じたことと今感じていることとほとんど共通ですが、ここにいる先生方、いろいろな技術を開発され、私どもも少しですが技術開発などをしたところ。実際に、例えば今日前におられる富沢さんたちと一緒に現場を見てみると『おれたちの技術はどこへいつているのだろう』と考えたことがあります。そういうときだからこそ、われわれとしてはどういう技術をどういうふうに普及するのかを考えたほうがいいのではないかと思います。そちらへ少し軸足を移したほうがいいという気がします。もちろん、先端技術、これからもどんどん新しい技術を発表されるのは当然のことだと思いますが、その技術をどのように現場に入れるのかという定着技術も研究しなければならぬのだと思います。ある意味では、北海道は普及組織というのはしっかりしており、そちらのほうにほとんどおんぶにだっこという状態で来たのですが、今はそういう状況ではない。私たちの研究の勢力のある部分は、そういう人たちと一緒に、技術の定着技術の開発という新しい分野がにつき込んでいいと私は思います。

あと今は天北におりますが、ここは土地利用型というのは実現できる場所だと思います。転勤して、あんなにまだ畑にローラーが転がっているというのは実はショックでした。そういう意味では使える土地がたくさんあるのだから、どういうふうにご利用するか、そういうようなところ、これまでの技術を定着する技術というものを、現場の人たち、普及員、もちろん農協の人たちも含め仕組みも作ることが重要と考えています。そういう意味では、ここにおられる100数人のうちの十数人の方々ぐらいはそちらへ向いていただければいいと思います。

司会 ありがとうございます。技術開発から普及技術の開発ですね。非常に大事なポイントの指摘だったと思います。

先ほどから十勝ブランドの話が議論されていますが、鶴川

さんから前段で土地利用型畜産の意味合いと今後の発展方法の指摘がありました。これと地域のブランド化ということのつながりをお聞きしたい。土地利用型畜産という方向に進むときに、生産物なり、あるいは地域の取り組み、ブランド化そのものが土地利用型畜産の発展に必要なもの、前提になる、そういった考え方でよろしいのでしょうか。少し考えを聞きたいのですが。

大庭 最終的にはそこまで行くと思います。今、ものを買われている方も非常にいろいろな形で勉強されていて、1つの例が機能性が一番いい例だと思います。機能性について細かいこと、例えばポリフェノールについても名前だけは皆さん知っている。そういう知識が非常に出てきています。次におそらく行くのは、今言われているのは、基本的にはやはり自然観。こういうふうなところでこういうふう採られたものがみんなの食卓に並びますよという、顔の見えるものが非常に望まれています。この部分では市場も相当伸びていると聞いています。ですから、今言ったように、こういうふうな形でこういうふうにした、というのがはっきりわかるような形で市場に出ていくような形態、あるいは加工商品に結び付く形態ができればこれは1つのアピールポイントになるし、これからはそれが多分、出ていかないと非常にきつくなるのではないかと考えています。

司会 鶴川さんいかがでしょうか。

鶴川 大庭さんのおっしゃるとおりで私も特に付け加えることはありませんが、ブランドと言ったときには、酪農の場合には大雑把に2つくらいの方向を分けて考えた方がいいと思います。1つは今大庭さんからの話にあったように、十勝ブランドということで、具体的な製品のレベルのブランドです。その中では先ほどの話にもあったように、生産履歴のことが出てくれば当然、原料乳の生産履歴なども出てくると思います。その牛乳が放牧なのか舎飼いなのか、あるいは違うか、そういったことが出てきますから、そういう中で土地利用型酪農というのはかなり有力な指標になってくるのではと思います。それが1つです。

もう1つ。そうは言っても、そういった十勝ブランドなり個別の製品のブランドで販売できる絶対量はやはり多くないと思います。北海道酪農で生産される牛乳のうち一部に過ぎないだろうと。多くの部分は一般の飲用乳なり乳製品ということで消費されるわけです。では、その中で土地利用型酪農というのはどのようなメリットがあるかという、それは先ほども申しましたが、デカップリングという政策体系になれば、納税者に支持されるような生産方式が求められ、それは土地利用型酪農だと思っています。先ほどのブランドの話に戻ると、大庭さんの話にもありましたが、北海道というのはもうそれ自体、都府県から見るともうブランドに立っているの

す。地域名がブランドになっているというのは、おそらく北海道と京都ぐらいではないかと言われていますが、そういう意味で北海道というのは優位な位置にあるわけですから、その優位なものをそのまま崩さずに維持していくときの手段として土地利用型酪農技術というのがあると思います。先ほど畜大の先生から、そうは言っても実態はそうでないものがたくさんあるではないかという話もありましたが、それはやはり隠す必要はありませんが、今あるイメージを崩す必要もないと思います。今崩す必要もないので、土地利用型酪農の技術を前面に出して、それをアピールしていけばいいということだと思います。放牧の話をする、特に生産段階の方から、放牧のことをアピールし過ぎると、先ほど松村さんの発言にもありましたが、舎飼いが悪いかのような印象を持ってしまうからあまり言うなという話をおっしゃるのですが、私は違うと思います。放牧の良さを言うのであって、別に舎飼いが悪いということは一言も言わないわけですから、いいところをもっと前へ出して、また少しでも広げていくというような取り組みが大事ではないかと思っています。

司会 ありがとうございます。もう残り時間が少なくなりました。十勝ブランドあるいはイメージと実際のギャップとの一体化が最後に鶴川さんから指摘がありました。後始末の問題をクリアしていかないと実態とイメージの一体化というのは難しいものがあると思います。田村さん、先ほどは幾つかの技術項目をこういう方法でできますよ、という話をいただきましたが、実際に十勝に当てはめたときに、十勝ブランドなり、あるいは土地利用型畜産という方向に流れていくときに、どういう方向、手段でうまく利用していくかということですが、その辺りの考えを少し。

田村 今回、私は、現状の飼養密度の関係から耕畜連携が必要であるという話をしました。耕畜連携という話は、言葉としてはいろいろなところで聞かれて、十勝は耕畜連携すれば現状の酪農ふん尿はうまくまわるのだという話もあります。しかしそれを技術的に見ていくと、先ほど私があげたように、結構大変な技術の導入が必要になるということを話しました。どういう方向でふん尿を利用していくのがよいかということ、私も今の段階ではなかなか言えません。少し違った話をしますが、十勝のふん尿量は年間大体500万トン出てきます。この500万トンの中の窒素量というのは、畑作や酪農で使われている化学肥料と比べても、匹敵する量の窒素が出ています。この膨大なものを有効に利用していくか、環境汚染の原因としてしまうか、絶対量が非常に大きいだけにどちらの方向にふれるかというのは、十勝農業にとって非常に大きなイメージ上の問題になります。環境保全型の経営に対して何らかの政策が打たれようとしたときには、非常に大きな問題になってくるだろうと考えています。有効に利用していくには、やはり土地に入れなければならないわけで、そうしたときに

は、1つは酪農家の経営責任できちんと入れていくという考え方が出てきて、きちんとした土地面積を確保して入れていかなければならないという方向が考えられます。私はこの方向が基本ではないかと考えています。ただし、十勝の酪農家の面積と頭数の比率を考えるとふん尿は確実に余剰なわけで、ふん尿のプラス面をこれからどんどん生かしていこうという考え方も重要だと思います。畑作生産でふん尿を肥料として利用し、化学肥料を減らせる。先ほど酪農のイメージの話もありましたが、畑作のイメージを考えても、有機物を十分に施用して化学肥料を減らした循環農業をしているのだということも訴えていくという方向も魅力あると考えています。この辺りの判断というのは、自分の地域、例えば市町村レベルでどういう方向で環境保全型農業を地域として作っていくかという姿勢にかかってくるのかと考えています。

司会 ありがとうございます。草地研究会で、最近のシンポジウムなりで出るテーマというのは、この土地利用型畜産、いかに飼料自給率を上げていくかというのを流れとして議論してきました。その中で今日、別な視点から、大庭さんからは地域ブランド、十勝ブランドということで取り組みを紹介していただきましたが、その中で私どもがこれまで議論してきた土地利用型畜産なり、あるいは飼料自給率の向上が十勝ブランドを支える技術開発に十分位置付けられるというのを皆さんの意見、大庭さんの話から感じました。今日のシンポジウム、特別まとめということではありませんが、これまで私どもが進めてきている技術開発なり、考え方の方向性ということ、エンドユーザーの視点から見ても、十分それに耐えうるものだと考えます。ですから、富沢さんの紹介もありましたが、これから地域での自給率の向上というためにさまざまな取り組みを進めているので、それから山川さんから指摘があったように、技術開発、それからもう1つ、普及技術、あるいは普及そのものを研究機関あるいは研究者の責務ではないかという指摘もありました。やはり、技術開発と生産者と、それからそれをつなぐという、そして、最後はエンドユーザーのところまでトータルとしてもものと考えていく重要性を十分に今日の話の中で感じましたので、これから、北海道の草地飼料作物の技術開発が地域の発展に十分寄与できる方向性を持って進めてきているということを確認して、今日のシンポジウムをこれで終わります。どうもありがとうございました。